

国際看護研究会 NEWSLETTER No.24

Japanese Society for International Nursing

2002.1.31 発行

21世紀の幕開けとなった昨年は、国際情勢の緊迫感が高まりました。今年は米国でオリンピック、日本でサッカーのワールドカップが開催されます。国境を越えて多くの人々が出会い、互いの文化・宗教・価値観を理解し合えるような機会になればと望みます。

本号の内容は以下のとおりです。

I. 運営委員会報告	p.1
II. 第23回国際看護研究会報告	p.1
III. 第24回国際看護研究会のお知らせ	p.4
IV. 海外情報	p.5
V. 訃報	p.8.
VI. 皆様へのお願い・お知らせ(事務局より)	p.8.

※本文に記載されている振込先やメールアドレスについては、現在は使われておりませんのでご注意ください。

I. 運営委員会報告

第21回運営委員会は、2月2日(土)に開催される。2001年度の総会で増員の認められた新運営委員を交え、2002年度の事業計画等について検討を行う予定である。

II. 第23回国際看護研究会報告

(2001年12月15日(土)国際協力事業団青年海外協力隊広尾訓練研修センターにて開催)

第23回国際看護研究会は、JICAより短期専門家としてブラジルの家族計画母子保健プロジェクトに派遣された藤原美幸氏にブラジルにおける母子保健の状況と、現地での看護協力活動の実際についてご講演いただいた。

<抄録>

ブラジル「光のプロジェクト」の体験から

前ブラジル家族計画母子保健プロジェクト短期専門家

藤原 美幸

1997年から2000年11月まで、5度に渡り、通算すると1年半以上「JICA ブラジル家族計画母子保健プロジェクト」に短期専門家としてかかわった経験を紹介させていただきます。このプロジェクトでの活動内容やプロジェクト終了後のブラジル等のラテンアメリカと日本国内での動きをお話ししたいと思います。特に日本の助産婦が国際協力の場でどのような役割を担い、何を伝えたのかを中心にお伝えできればと思います。

<「光のプロジェクト」とは>

ポルトガル語で出産のことを「光(Luz)をあたえる」と表現することから、出産にフォーカスをあてたこのプロジェクトは、「Projeto Luz (光のプロジェクト)」と通称されていました。プロジェクトは、1996年4月から2001年3月までの5年間、ブラジル東北部のセアラ州保健局が協力相手(カウンターパート)となり、州都フォルタレーザ近郊の5市をモデル地域に展開されました。プロジェクトの目的は、東北ブラジルの保健従事者のトレーニングを通じて、母子保健状況を改善することです。

プロジェクトの初年度に実施した、介入活動を方向づけるためにモデル地域での調査から明確になったことは、非人間的な出産の現場でした。法的に助産資格のある医師や看護婦は極端に少なく、助産の知識や技術は持ち合わせない准看護婦がほとんどの出産に携わります。そして、入院した産婦さんは、側でケアする者もなく、放置されたような状態におかれ、不安と恐怖で叫び声をあげるだけでした。女性たちは、自分は何も言えない、何もできない、病院の言うままと言った無力感に陥り、そこには「非人間的な出産の文化」があるのみです。

ブラジルにおける出産には、助産婦という資格がない、帝王切開率が約40%と世界一多い、医療介入がルーチン化されているといった問題があります。そういう国で、助産の概念を確立し、実際に助産、ケアができる保健従事者を育成していくことが活動の目的になりました。そして、「人間的な出産と出生」をキーワードに、出産にフォーカスをあてた介入活動がスタートした2年目から、長期専門家として助産婦が派遣されています。

<助産婦が伝えたこと>

出産は病気ではない、不必要な医療介入は避ける、女性たちの産む力と子どもの生まれてくる力を信じよう等々の考え方を、日本の助産院での出産を紹介することから取りかかりました。そして、現場で助産に携わる医師、看護婦そして准看護婦のトレーニングを様々なレベルで実施しました。例えば、ケアの中心になる准看護婦には、出産経過をしっかりと

みていける知識や技術、そして精神的なサポートやマッサージで痛みを和らげる方法など、温かなケアができるための方法を演習、実習をふくめて実施しました。

医師や看護婦には、特に出産の環境（施設のスタッフも含め）を、静かで落ち着き、そして温かなものにすることや、家族の立ち会いを促進するといった管理者向けのコースもありました。さらに、こうした「お産のヒューマニゼーション」を広めるために、今後リーダーとなるべき医師や看護婦には、トレーナーのためのトレーニング（TOT）も4年度、5年度に実施し、州内全体で約70名のリーダーが育っており、受講後は各自の市や施設で自らが講師になってトレーニングを実施するようになっております。

各レベルのトレーニングにおいて、実際のケアの中味を伝えたのが助産婦、特に自然出産を心がけ、女性たちに寄り添い、見守り、待つことを実践している開業助産婦たちでした。医療介入の多いお産の経験しかないとならぬ自然なお産のプロセスはみえないばかりか、助産婦自身がお産に恐怖心を持ち、問題をさがしだし、医療介入をしがちです。「お産は自然なんですよ」と言うだけではなく、実習を通じて、一緒に産婦さんの側において、手を添え、経過を五感を使ってみる、待つ、誕生の瞬間を共に喜ぶ経験を伝えたのです。その経験は、産婦さんだけではなく、助産にかかわった准看護婦や看護婦にも大きな感動と喜びをあたえ、そしてその感動の経験が、さらなる変革につながっていくのです。そういう日本の助産婦、特に開業助産婦が持っている確かな技術と助産の心を、きっちり手をそえて伝えていったことで、このトレーニングの素晴らしい成果につながったのです。

このプロジェクトは、JICAプロジェクトとして最も多くの助産婦が長期、短期専門家として関わったのではないかと思います。そして、また、助産婦の力が十分に発揮されたプロジェクトでもあったと言えます。

<終了後の継続性>

プロジェクト最終年に開催した「出産と出生のヒューマニゼーション国際会議」には、国内外から約2000名（日本から50名）が参加し、3日間の会議が終了した翌日には、「出産のヒューマニゼーション」ラテンアメリカ・ネットワークの設立集会も開催されました。

プロジェクト活動の成果から、保健省の補助金による看護婦による助産施設（助産所）が全国に50か所建設され、医師だけについていた分娩手当金が看護婦にもつくようになりました。つまり、助産を医師の手から少しずつ看護婦にシフトさせる道筋ができたわけですが、それが助産婦養成につながっていけばと願っています。さらに、助産所を運営することになる看護婦のための日本の助産所での集団研修も来年度から3年間実現の運びになっています。また、プロジェクトサイトでは、カウンターパートだった医師や看護婦が「人間らしい出産」を普及するためのNGOを設立し、すでに市や病院の委託を受けトレーニングを実施しています。

ラテンアメリカ・ネットワーク（中南米とカリブ）も、ラテンアメリカの出産のヒューマニゼーションを目指し活発に活動しています。発足1周年記念誌が届きましたが、そこには各国の出産にかかわる組織、グループが網羅され、1年間の活動内容や論文も掲載さ

れていました。また、4月上旬にはチリで再び「出産のヒューマニゼーション国際会議」が開催されることになっています。さらに、パラグアイでは、青年海外協力隊員の助産婦が中心になって、ブラジルの経験に学びたいと活動しており、6月にわたしが派遣されセミナーを実施し、そして、来年1月に再び行き、同様のセミナーを保健省助産局主催で開催することになっています。その後、パラグアイの助産婦とブラジルに同行し、今後の交流の橋渡しもする予定です。

日本国内では、プロジェクトに参加した者が様々な機会を利用し、この経験を分かち合うようにしています。そして、セアラのNGOを支えるための「セアラの会」というNGOも立ち上げました。今後は、日本国内の出産や助産について、ブラジルやラテンアメリカとどうつながっていくのか等々、積極的に発言していきたいと思っています。

最後になりますが、この「光のプロジェクト」は、ある意味では日本の助産婦の力量が試された場でしたが、素晴らしい成果をあげることができました。それは、日本でも素晴らしい仕事をしている助産婦、特に開業助産婦がいたからであったと思っています。

Ⅲ. 第24回国際看護研究会のお知らせ

第24回国際看護研究会は、パキスタンでのハンセン病患者の診療、アフガニスタンでの難民への援助を中心に、長年にわたって国際医療協力活動を行っている中村哲医師をお招きし、講演をしていただきます。

日 時：2002年3月16日（土） 15：00～17：00

会 場：国際協力事業団青年海外協力隊事務局広尾訓練研修センター

テーマ：アフガニスタンにおける医療協力活動（仮題）

講 師：中村 哲氏（ペシャワール会現地代表、PMS院長）

定 員：50名

参加費：会員 無料

今回は多数の参加希望が見込まれるため、会員優先の事前申し込み制をとります。参加ご希望の方は、連絡先住所、氏名明記の上、事務局（9ページ参照）まで FAX またはメールまたは郵便で申し込みをして下さい。2月28日必着をお願いいたします。定員を超えた場合は3月9日までにご連絡いたします。

IV. 海外情報

本号より3回にわたり、本会運営委員である根本恵子氏の、アメリカ合衆国の留学記を掲載します。

ウィスコンシン大学留学記 (1)

アメリカ合衆国ウィスコンシン大学マジソン校
看護学部 博士課程 根本 恵子

看護学生だった頃、アメリカから来ていた留学生の一人が中西部にあるウィスコンシン州の出身だった。今となっては名前を思い出せない。ジョンかダンかジョーだったかも知れない。その彼は、自分の故郷であるこの州が大好きだったらしく、何かにつけてはウィスコンシン イズ ナンバーワンと豪語していた。当時の私は、カリフォルニアやニューヨークしか知らず、ウィスコンシンって一体どこにあるんだろうぐらいにしか気に留めていなかった。しかも、彼の立場を自分に例えて言うなら、福島生まれの私が「福島県は日本で一番よ〜」っているのと同じで、そんなマイナーな地域を人に自慢するなんて彼って変な人ぐらいに思っていた。その頃の私は、田舎（自分の故郷）よりも、むしろ都会が優れているという意識が強かったからだ。自分の故郷がもつのどかさや、何年たっても変わらない町の景色に私が感謝するようになったのは、他の地域や外国に住んだりして、ふるさとがもつ独自の良さに気づいてから後のことである。そんな私がまさか後年になって、彼が誇るこの州に来ることになるうとは思ってもよらなかった。半面ここに住んでみて、彼のこの州を思う気持ちが少しだけわかったような気がする。

現在私は、ウィスコンシン大学マジソン校看護学部の博士課程に在籍している。ここで生活するようになってから体験したことや、考えさせられたことなどを3回に分けて報告したいと思う。第一回目である今回は、ウィスコンシン州の紹介とここに住むアメリカ人の体型について述べる。第二回目は、さして優秀でもない私がウィスコンシン大学看護学部博士課程に進学出来たいきさつ、および研究室の仕事を通じてかかわっている季節農業労働者について。第三回目は、ここでみた家族像および現在研究をすすめている夫婦間暴力について書く予定である。

ウィスコンシン州の紹介

ウィスコンシン州は五大湖の西にあり、その面積は北海道の約2倍あるいは日本の1/3よりやや大きい。主な産業はトウモロコシや大豆、肉牛、乳製品などの農業である。特に乳製品の生産高ではカリフォルニア州と1、2位を争う。州の人口は536万人で、そのうちの89%が白人によって占められている(2000年米国勢調査)。この州の良さはなんといっても豊かな自然とその美しさ、およびのんびりした風土であろう。大学のあるマジソン

市から車で 30 分ほど郊外に出ると、視界は牧草やトウモロコシ畑の広がる大穀物地帯となる。実家から遊びに来た父は、農場に並ぶ、飛行機から見なければ全体がわからないほどの巨大なスプリンクラーを見て感激していた。また、一耕地辺りの面積があまりにも広いことに驚いていた。農業を営む父にとっては、狭い耕地をいかに効率よく使い生産高を上げるかという、日本の農家としての常識が覆されたのかもしれない。私もここに来た当初は、青い空や延々と続くトウモロコシ畑、ならびに丸々と肥えた牛の群れに感動したものだ。ここは東京の帝国ホテル旧館を設計した建築家、フランクロイドライト氏の故郷で、彼が手がけた建築物がある。というわけで、建築が好きな人には、お勧めの観光スポット間違いなしであろう。

学園都市マジソン

マジソン市は州の南部にあり、札幌とほぼ同じ緯度に位置する。ミルウォーキーに次いで、ウィスコンシンで二番目に大きい都市である。州都であり、同時に学園都市でもある。この市はこじんまりとしている。マジソンでもっとも賑やかな繁華街といわれるステートストリートでさえ、徒歩約 15 分でその全容を把握してしまえるほどの小ささである。しかも、治安が良い。試験期間になると、深夜まで図書館に残って勉強をしていた女学生が、一人でアパートに帰っていく。夏は、夜でも女学生が一人で暗い裏通りをジョギングしている。毎週末には、飲んだくれた学生が町をたむろし、バーの前も店の中も酔っ払いでごった返しになる。かといって、警察沙汰になる訳でもない。それに、物の値段も他の州、たとえば車で約 2 時間半のイリノイ州にあるシカゴに比べると数段に安い。というわけで、勉強に集中したい人には実に住みやすいところであると思う。逆にいうと娯楽らしい娯楽もなく、勉強以外にすることがなにもないところともいえる。

太っていること、痩せていること

コレステロールの含有量が高い乳製品が豊富だけあって、ここでは太った人をよく見かける。病院の待合室に 10 分座っているだけでも、少しお太りかしら？というような患者さんや付き添いの家族を何組も目にすることができる。以前、地域看護を教えている教授が私に新聞の切り抜き写真をみせて、可笑しいでしょう？と言った。見ると「ウィスコンシンにいる私の友人」というタイトルで、「太った」白人の一家がソファに座ってにっこりと微笑んでいた。でも、私にはなぜそれがおかしいのかわからなかった。というのもこの州の人々の太った体型に慣れてしまっていたから、アメリカ人だったら太っていて当たり前と思っていたのである。ところが、聞くところによると、ウィスコンシン州の平均体重は、統計でアメリカで 2 位という「重さ」なのだそうである。すなわち「ウィスコンシンにいる私の友人」と「太った私の友人」とは暗に同じことを意味する。だから、先生は写真をみてウケていたのだった。

でも、実をいうと私にはこの環境がとても有り難かった。なぜなら、日本ではやや太めだった私が、ここでは標準的体型になってしまうからだ。実際、「スタイル」が一応気にな

る私にとって、人と比べて「太っている」ことを気にしなくても良いというのはかなりの解放感がある。それに、日本のデパートだったら気に入った洋服でも、サイズが合わなくて買うのを諦めることが多かったが、ここでは上には上のサイズがあるので気楽である。自分に合うサイズがない、という劣等感に悩まされることがない。しかも、洋服のサイズに合わせて自分の体を押し込めるのではなく、自分の気持ちに合わせて洋服が選べるので、買い物にたいする満足感が違う。考えてみれば日本にいたときの私は、自分が「標準」的体型でないことにとらわれすぎていたと思う。その抑圧感というのは、例えば自分に合う洋服が見つからないとか、他の人と比べて自分が太めであるとかいう日々の体験が積み積もって形成されたのだと思う。でも、ここに来てからは、他の人と比べて自分が痩せているとか、太っているなどと決めつけるのは、ばかばかしいことなんだと思うようになった。というのも、あまりにもいろんな体型の人がいて、しかも色んなサイズの洋服があるので、標準っていうものがわからなくなったのである。結局のところ、どんな体型であるにせよ、その人がその人らしくしていられれば、それでいいってことなのかなと思うのである。

では逆に、ウィスコンシンに住むアメリカ人女性が、太っていることを気にしていないのかと問われれば、答えは否であろう。彼女たちは彼女たちで真剣に肥満について考えているだろうし、誰からも愛される理想的な体型というのを求めている。例えば、スーパーには低脂肪と表示された食品や、ダイエット炭酸飲料が山程溢れている。有機野菜がもてはやされ、豆腐や寿司などがダイエット食として高い人気を呼んでいる。日常普通にテレビに映るスター達は、決まったように体を露出させて、ボディの美しさを強調させている。こういった「あおり」に乗じるかのように、雪が深々と降る零下の日でも、欠かさずジョギングをしている女性が多い。学内では、病的にやせほそった 20 代前半の女学生を見ることがある。あるいは、わざと体の線が強調されるようなタイトな服を着て、すれ違う男性の視線を満足気に浴びている女学生もいる。これらの現象をみるにつけ、私は豊かな土地ウィスコンシンというイメージとは裏腹な、複雑な現実にはッとさせられる。個性が重んじられ、多様な価値観があふれているだけに、むしろアメリカ人女性の「理想的な体型」に関する思いは、根が深いのかもしれない。勿論、これは憶測であるけれど。

肥満ということに関連して食べ物のことについて書くと、この州とピザとは切っても切り放せない関係にあるようである。最初ここに来た頃は、大人や小さな子どもは勿論、70才を過ぎたかと思われるお年よりさえも、大きなピザを食べているので驚いた。そんなに小さいうちから、あるいはお年を召されてから大量の脂肪分をとって大丈夫なのだろうか、と余計なお世話をしたものである。実際、ピザは安いし（例えば、L サイズ 4 枚で 10 米ドルのピザがスーパーで売られている）、手間がかからないし（オーブンに入れて焼くだけ）、美味しいので、多くの人によって消費されるのも道理である。ちなみに以前英語を教えてくれたアメリカ人の友達に、いつも何食べてるの？と聞いたら答えはピザだった。彼女は料理をしない人で、一週間ピザを食べても問題なしと言っていた。飲み物は？と聞いたら牛乳。さすが乳製品が豊富な州に生まれた彼女だけある。かといって、彼女は私の目から見て太っているわけでもなく、魅力的な体型をしていたから、また不思議だった。かくい

う私も、来た当時に比べると大部ここの食べ物に慣れて、ピザをよく食べるようになった。冷凍庫にはいつもピザの買い置きがあるし、ピザを2日や3日続けて食べても問題なしである。というわけで、私も一週間ピザを食べ続けていた、なんていう日がいつか来るかもしれない。

V. 訃報

第12回国際看護研究会（1999年3月6日）に、「タイとミャンマーにおけるエイズの現状と対策」というテーマでご講演いただいた、本会会員である大森絹子氏が昨年12月4日に逝去されました。

—大森氏略歴—

大阪府生まれ。

看護婦、保健婦、助産婦、メディカルソーシャルワーカーとして臨床および地域看護を経験した後、1982年から1986年まで、日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）より派遣されて、タイ北部の山岳民族カレンに対する地域保健医療に従事。

その後、アメリカのケース・ウェスタン・リザーブ大学大学院にて医療人類学および国際保健学を専攻。

1990年から1992年まで再びタイ北部メーサリエンに赴任。巡回診療班の指導、カレン族に対する医療人類学的調査を実施。

1994年よりタイおよびミャンマーにおけるエイズプロジェクトのコンサルタント兼コーディネーターとして、ワールド・コンサーン・インターナショナルに協力。

1997年から金沢大学医学部保健学科勤務。地域看護学講座教授。

医療人類学博士。

ご存命中のご活躍に敬意を表し、本会へのご協力に感謝申し上げますと共に、ご冥福をお祈り申し上げます。

VI. 皆様へのお願い・お知らせ（事務局より）

1. NEWSLETTER の「海外情報」欄の記載事項を募集しております。会員の皆様の活動報告、活動国の様子、医療事情あるいは旅行記など海外に関する記事をお待ちしております。事務局までお送りください。
2. 会員の皆様からのご意見を反映してさらに改善を図りたいと思います。講演会のテーマ、NEWSLETTER についてなど何でも結構ですので、本会へのご意見をお聞かせください。
3. 第4回学術集会抄録の残部があります。ご希望の方は、その旨を明記の上、500円分の切手（80円以下の小額切手）と返送先を書いて210円分の切手を貼ったA4サイズの

返信用封筒を事務局にお送りください。

4. 本研究会の運営は年会費によって賄われています。封筒宛名ラベル右下に最終の会費納入年度が記載されていますので、本年度会費未納の方は至急お振込みください。年会費は2000円です。振込先は最終ページにある連絡先をご覧ください。
 5. 本研究会では事務局でお手伝いをしてくださる方を探しています。詳細は事務局までお問い合わせください。
-

編集後記：

11月2日から6週間ウズベキスタンで保健省アドバイザーとして仕事をしていた。アフガニスタンの隣国であるため、職場の方や友人にはずいぶん心配されたものだが、実際にはこれまで私が活動したどこの国よりも平穏で安全だった。何しろ、外出禁止令があったり、町に突然戦車が出てきたり、等等（すべて自分の体験）ということは一切なかったのである。それにしてもこんな体験をしている私って……。(森)

先日テレビでパキスタン国にあるアフガニスタン難民キャンプでのレポートを見た。幼い子供達が家族の生活を支えるために住み込みで学校にも行かずに働いていた。大人は「平和というものをこの目で見てみたい」と語っていた。一日も早く故郷で生活ができるようになることを祈りたい。(田中)

最近ニュースでよく耳にするアフガニスタンに近いパキスタンのクウェッタという町に滞在していたことがある。乾燥した山岳地帯で、ラクダやアヒルを町中で見かけるのどかな生活風景があった。訪れる外国人が少ないせいか、テント張りのバザーではしつこい客引きにあうこともなかった。素朴で質素な生活を営む人々に早く平和を取り戻して欲しいと切に願う。(伊藤)